

7. 創立百周年を迎えて

昭和57年（1982年）10月10日、本行は開業後満100年を迎えたが、2日後の10月12日に本行本店内において創立百周年の記念式典を挙行了。この式典には来賓として国内各方面の代表者約200名が出席し、鈴木首相、渡辺蔵相ならびに荒木全国銀行協会連合会会長からそれぞれ祝辞が述べられたが、海外からも多数の中央銀行首脳が式典に参加した。出席した中央銀行は米州、ヨーロッパ、アジア、オセアニアなどの32行に達した（B I Sを含む）が、このうち、アメリカ、西ドイツ、イギリス、フランス、イタリア、オランダ、ベルギー、スイスなど27か国中央銀行からは総裁自らが出席した（アメリカは連邦準備制度理事会議長）。このように本行が海外の主要中央銀行総裁のほとんどを来賓として迎え、記念式典を挙行できたのは、100年前の創立時には夢想だにしえなかった事からであり、この間におけるわが国経済の発展とともに、国際金融界における本行の地位の飛躍的な向上を示すものといえよう。

本書第1巻の冒頭（「序にかえて」）に掲載したように、前川総裁はこの記念式典において「中央銀行の使命」と題してその所信を述べたが、そのなかで、「過去を振り返り、今日の日本経済を思う時、私どもは通貨価値の安定こそ国民経済の健全な発展の基盤であり、国民生活安定のよりどころであることを一層強く確信するものであります」と本行の使命の重要性を改めて強調するとともに、こうした考え方のもとで金融政策を運営していく場合、時として「厳しい、不人気な政策を実行しなくてはならないこと」もあろうが、本行は「国民から負託された使命の達成のため全力を挙げて努力する所存である」旨、その決意を披れきした。

本行はこれまで100年の間、わが国の中央銀行として通貨価値安定への努力を通じて、日本経済の健全な発展に対し少なからぬ貢献を果たしてきた。しかしこの間、ときにより激しいインフレーションの発生を阻止しえなかったことなど、必ずしも全期間にわたってその使命を十分に達成しえたわけではない。こうした遺憾な事例を生じた理由や背景については、そのつど詳述したように、もろもろ

の事情が複雑に絡んでいたことが指摘されうるものの、本行の政策運営が適切でなかったことは残念ながら否定できない。

創立百周年という大きな区切りを迎えたことは、このような過去における政策運営上の誤りにつき、厳しい反省を加えるとともに、先人の残した良き伝統を守り、将来に対する新たな決意を固めるべき、この上ない機会を与えられたものといえよう。本行をめぐる内外の環境はまことに厳しいものがあるが、記念式典における前川総裁の講演は、以上のような本行の反省と決意を率直に表明したものであり、この「日本銀行百年史」の刊行もまた同じ趣旨に基づくものである。